

Redécouvrons

Les 26, 27 juillet, 1er, 2, 3 août 2025

Jean-Luc Godard

À l'Espace Images de l'Institut français de Tokyo



フランス映画入門 ゴダール編

2025. 7/26(土)27(日)・8/1(金)2(土)3(日) 会場: 東京日仏学院エスパス・イマージュ

ジャン＝リュック・ゴダールの映画をスクリーンで見よう！誰よりも果敢に時代に寄り添い、映画を思考することで、世界を思考し続けた偉大なるアーティスト、ゴダールを今、発見してみよう。

全世界にセンセーションを引き起こした長編デビュー作『勝手にしやがれ』に始まり、『中国女』、『軽蔑』、『彼女について私が知っている二、三の事柄』など、作品ごとに映画の実験をし続けた豊潤なる60年代、アンヌ＝マリー・ミエヴィルと設立した工房『ソニマージュ』で制作され、ゴダールにとって過渡期となった作品『ヒア&ゼア・ことよそ』。そして21世紀のゴダールを理解するうえで欠かすことができない『映画史特別編 選ばれた瞬間』と『イメージの本』。あるいはゴダールがこよなく愛したジャン・ルノワールの傑作『恋多き女』。上映とともに映画研究者、批評家によるレクチャーで、ゴダールの映画の実践と世界へのまなざしを一緒にたどっていきましょう！

Programme 上映作品(すべてデジタル・日本語字幕付)

勝手にしやがれ À bout de souffle [フランス/1960年/90分/モノクロ]

監督・脚本:ジャン＝リュック・ゴダール

原案:フランソワ・トリュフォー 撮影:ラウル・クタル

出演:ジーン・セバーグ、ジャン＝ポール・ベルモンド、ダニエル・ブーランジェ、ジャン＝ピエール・メルヴィル

盗んだ車で白バイ隊員を撃ち殺したミシェル・ポワカルは、マルセイユからパリに赴き、アメリカ人留学生パトリシアと再会する。ロケーション撮影の瑞々しさ、演技の自発性、自然光、あるいはジャンプカットや「つなぎ間違い」を活用する斬新な編集手法など、様々な面で映画に革命を起こしたゴダール29歳の時の長編第一作。

「私はフィクションを記録した」(JLG)



© 1960 STUDIOCANAL - Societe Nouvelle de Cinematographie - ALL RIGHTS RESERVED.

軽蔑 4Kレストア版 Le Mépris [フランス＝イタリア＝アメリカ/1963年/104分/カラー]

監督・脚本:ジャン＝リュック・ゴダール

原作:アルベルト・モラヴィア 撮影:ラウル・クタル

出演:ブリジット・バルドー、ミシェル・ピコリ、ジャック・バランス、フリッツ・ラング

脚本家のポールは映画プロデューサーのプロコシュから、フリッツ・ラングが監督する大作映画「オデュッセイア」の脚本の手直しを依頼されてカプリへ。その地で妻のカミーユは彼に対して軽蔑のまなざしを向け始める。

『『軽蔑』の主題は、互に見つめあい、裁きあい、ついでそれぞれ映画によって見つめられ、裁かれる人たちである。そしてその映画はここでは、自分自身の役を演じるフリッツ・ラングによって象徴されている。要するに、彼はこの映画の良心、この映画の誠実さを体現しているのである』(JLG/1963年)



© 1963 STUDIOCANAL - Compagnia Cinematografica Champion S.P.A. - Tous Droits réservés

アルファヴィル Alphaville [フランス＝イタリア/1965年/99分/モノクロ]

監督・脚本:ジャン＝リュック・ゴダール

撮影:ラウル・クタル

出演:エディ・コンスタンティーヌ、アンナ・カリーナ、エイキム・タミロフ

秘密諜報員レミー・コーションは、人工知能アルファ 60 に支配された未来都市アルファヴィルへ向かう。アルファヴィルでは、感情が禁止され、特定の言葉が抑圧されている。犯罪映画のヒーローをSFの世界に投入したゴダールは、後の偉大なディストピア映画(『2001年宇宙の旅』、『ブレードランナー』、『ソイレント グリーン』)を予感させる言語とモチーフを作り上げた。

『『アルファヴィル』は、ややアンドレ・ブルトンの『ナジャ』のようである。パリの街を歩けば、そこに超現実が現れる』(JLG/1965年)



© DR

彼女について私が知っている二、三の事柄

Deux ou trois choses que je sais d'elle [フランス/1960年/90分/カラー]

監督・脚本:ジャン＝リュック・ゴダール

撮影:ラウル・クタル

出演:マリナ・ヴラディ、アニー・デュプレー、ロジェ・モンソレ

1966年のパリ。公団団地に住む主婦が、光熱費などの高騰によって売春せざるをえないというアンケート調査から着想を得たゴダールは、女性たちの日常の姿を通じて資本主義社会の歪みを描き出す。

「彼女(それ)は新資本主義の残酷さ。彼女(それ)は現代美の死。彼女(それ)は構造のゲシュタポ」(JLG/1966年)



© DR

中国女 *La Chinoise* [フランス/1967年/96分/カラー]

監督:ジャン＝リュック・ゴダール

撮影:ラウル・クタル

出演:アンヌ＝ヴィアゼムスキー、ジャン＝ピエール・レオ、ジュリエット・ベルト、ミシェル・セメニアコ

中国が文化大革命の最中にあった1967年、夏。それぞれ境遇の異なる5人の若者がパリのアパートマンで共同生活をしながら、『毛沢東語録』を読み、議論を交わし合う。やがて哲学科の大学生ヴェロニクは、ある文化人の暗殺を提案するが……。公開から一年も経たずして起こった五月革命を予見したといわれる作品。第28回ヴェネツィア国際映画祭審査員特別賞を受賞。

「これらの若者は、ゴーリキーの『どん底』の登場人物のように、社会の5つの特定の階層を象徴している」(JLG/1967年)



© Gaumont

ヒア&ゼア・こことよそ *Ici et ailleurs* [フランス/1975年/53分/カラー]

監督:ジャン＝リュック・ゴダール、アンヌ＝マリー・ミエヴィル

撮影:ウィリアム・ルブシャンスキー

1973年末、ゴダールはパリを離れて、フランス南東部の地方都市グルノーブルに拠点を移し、公私にわたって新たなパートナーとなるアンヌ＝マリー・ミエヴィルとアトリエ「ソニマージュ」を構える。その第一作として、ヨルダン、レバノン、シリアでジャン＝ピエール・ゴランと撮影するも、未完に終わった『勝利まで』(1970年)のラッシュをもとに製作された作品。

「『ここ』では、普通のフランス人の家族がテレビを見ている。『よそ』には、黒い九月事件の前に撮影されたパレスチナの戦闘員たちがいる」(JLG/1976年)



© Gaumont

映画史特別編 選ばれた瞬間

Moments choisis des Histoire(s) du cinema

[フランス/2002年/83分/カラー]

監督:ジャン＝リュック・ゴダール

1988年から1998年の10年の歳月をかけて製作した合計4時間半、全8章からなる壮大なるモニュメント『映画史』をゴダール自身が再構築、劇場公開用作品として35ミリフィルムで製作された作品。

「『選ばれた瞬間』はどこを切り取っても映画や映画史をめぐる独自の見解に満ち溢れていて、『映画史』を煮詰めていった挙げ句にその核心部分だけが残ったような作品となっている」(堀潤之)



© DR

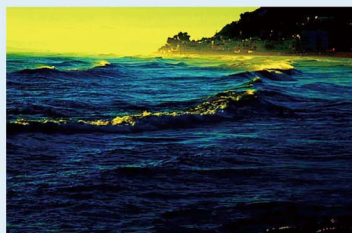
イメージの本 *Le Livre d'image* [スイス＝フランス/2018年/84分/カラー]

監督:ジャン＝リュック・ゴダール

ゴダールが暴力・戦争・不和に満ちた世界への怒りを、様々な絵画・映画・文章・音楽で表現した作品。5章で構成され、ゴダール自らがナレーションを担当した。

「映画は足場のようなものだ。形も定かならぬ積み重ねで、最終的には断片どうしが複雑に絡み合う。しかし、映画は死刑台でもある。アイデアの死刑台だ。私たちはいつもアイデアをカットし、編集段階で多くが捨てられる…」(JLG/2019年)

「88歳のゴダールが4年がかりで世に問う新たな傑作のこの異様な美しさはどうか」(蓮實重彦)



© Casa Azul Films - Ecran Noir productions

恋多き女 *Elena et les hommes* [フランス/1956年/99分/カラー]

監督:ジャン・ルノワール

出演:イングリッド・バーグマン、ジャン・マレー、メル・フェラー、マグリ・ノエル、ジュリエット・グレコ

ベルエポックの時代のフランス・パリを舞台に、ルノワール自身が「ファンタジー・ミュージカル」と名付けた、粋でエレガントな恋のかけひき。ルノワールが盟友イングリッド・バーグマンに捧げたこの作品に、ゴダールは最大限の賛辞をおくっている。

「この映画は芸術であると同時に芸術理論であり、美であると同時に美の秘密であり、映画であると同時に映画の注釈なのだ。(…)映画とはなにか?という疑問に対して、『恋多き女』はこう答えている。映画以上のものだ、と」(JLG)



© 1956 Gaumont - StudioCanal Image

トークイベント *Conférences*

7/26(土) 18:00～19:30 映画のアトリエ「『軽蔑』、あるいはスタジオ・システムの崩壊後にいかなる映画が可能なのか」講師:須藤健太郎(映画批評家)

7/27(日) 11:00 『彼女について私が知っている二、三の事柄』アフタートーク 講師:坂本安美(アンスティチュ・フランセ映画主任)

7/27(日) 18:30～20:00 映画のアトリエ(オンライン・通訳付き)「現代芸術と同時代であるゴダール」講師:ドミニク・パイニー

8/1(金) 18:30 『ヒア&ゼア・こことよそ』アフタートーク 講師:堀潤之(映画研究/表象文化論) (元シネマテーク・フランセーズ館長、映画批評家、展覧会キュレータ)

8/2(土) 15:30～17:00 映画のアトリエ「『映画史』から『シナリオ』へ:21世紀のゴダール」講師:堀潤之

8/3(日) 18:15～19:45 映画のアトリエ「ルノワール/ゴダールをめぐる断片的な考察」講師:角井誠(映画研究・批評)

7. 26 [土]	11:00	勝手にしやがれ À bout de souffle [90分] 上映前、坂本安美による作品紹介あり Précédé d'une présentation par Abi SAKAMOTO
	13:30	中国女 La Chinoise [96分]
	15:45	軽蔑 Le Mépris [104分]
7. 27 [日]	18:00	映画のアトリエ 『『軽蔑』、あるいはスタジオ・システムの崩壊後にいかなる映画が可能なのか』 [約90分] 講師:須藤健太郎 Conférence spéciale par Kentaro SUDOH
	11:00	彼女について私が知っている二、三の事柄 Deux ou trois choses que je sais d'elle [90分] アフタートークあり 講師:坂本安美 Suivi d'une conférence par Abi SAKAMOTO
	14:00	映画史特別編 選ばれた瞬間 Les Moments choisis des Histoire(s) du cinéma [83分]
	16:00	アルファヴィル Alphaville [99分]
	18:30	映画のアトリエ *オンライン・通訳付 「現代芸術と同時代であるゴダール」 [約90分] 講師:ドミニク・パイニー Conférence spéciale en ligne par Dominique PAINI

8. 1 [金]	14:00	中国女 La Chinoise [96分]
	16:30	勝手にしやがれ À bout de souffle [90分]
	19:00	ヒア&ゼア・ことよそ Ici et ailleurs [53分] アフタートークあり 講師:堀潤之 Suivi d'une conférence par Junji HORI
8. 2 [土]	11:00	彼女について私が知っている二、三の事柄 Deux ou trois choses que je sais d'elle [90分]
	13:15	映画史特別編 選ばれた瞬間 Les Moments choisis des Histoire(s) du cinéma [83分]
	15:30	映画のアトリエ 「『映画史』から『シナリオ』へ:21世紀のゴダール」 [約90分] 講師:堀潤之 Conférence spéciale par Junji HORI
	18:00	イメージの本 Le Livre d'image [84分]
8. 3 [日]	11:15	ヒア&ゼア・ことよそ Ici et ailleurs [53分]
	13:30	イメージの本 Le Livre d'image [84分]
	16:00	恋多き女 Elena et les hommes [99分]
	18:15	映画のアトリエ 「ルノワール/ゴダールをめぐる断片的な考察」 [約90分] 講師:角井誠 Conférence spéciale par Makoto SUMII

入場料金:一律1,100円 (全席自由/整理番号順)

Peatix (<https://ifjtokyo.peatix.com/events>) にて発売中

*窓口販売はございませんのでご注意ください。

上映開始15分前開場:上映開始10分後以降の入場はご遠慮ください。



フランス映画入門 ゴダール編

主催・会場:東京日仏学院

助成:アンスティチュ・フランセ本部、CNC 特別協力:アニエスベー

協力:ゴモン、ファインフィルムズ、ハーク&カンパニー、アイ・ヴィー・シー、KADOKAWA

マーメイドフィルム、オンリー・ハーツ、タマサ・ディストリビューション

Redécouvrons Jean-Luc Godard

Organisé par l'Institut français de Tokyo

Avec le soutien du CNC, agnès b.

Remerciements : Gaumont, Fine Films, Hark&Company, IVC, KADOKAWA,

Mermaid Films, Only Hearts, Tamasa Distribution.

会場・お問い合わせ:東京日仏学院

〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15

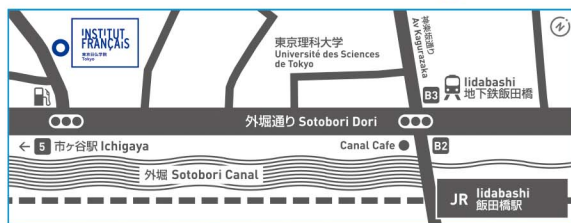
tel:03-5206-2500 fax:03-5206-2501

www.institutfrancais.jp/tokyo

instituttokyo

institut_tokyo

institut_tokyo



関連企画

ジャン＝リュック・ゴダール

《感情、表徴、情念 ゴダールの『イメージの本』について》展

Sentiments Signes Passions,

à propos du Livre d'image, J.L.Godard

会期 | 2025年7月4日(金)~8月31日(日)

時間 | 12:00~20:00(展示室入場は開館の30分前まで)

会場 | 王城ビル(新宿区歌舞伎町1-13-2)

主催 | 《感情、表徴、情念

ゴダールの『イメージの本』について》展 実行委員会

アーティスト/キュレーター | ファブリス・アラニーヨ (Fabrice Aragno)

チケット料金 | 一般2,200円(税込)

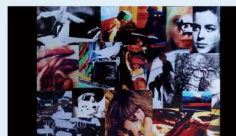
公式サイト | <https://godardtoko.com/>

チケット販売 | <https://art-ap.passes.jp/user/e/godard/>



ジャン＝リュック・ゴダール監督 遺作『シナリオ』

Scénarios de Jean-Luc Godard



フランス=日本/2024年
54分/カラー

製作:Écran noir productions, Arte France, ねこじゃらし/Roadstead
配給:ねこじゃらし

Roadstead 販売中 | 購入特典:『シナリオ』制作ノートレプリカ

2025年9月5日(金)より

Bunkamura ル・シネマ 渋谷宮下、シモキタ・エキマエ・シネマ K2

Stranger ほか全国劇場にて順次上映

<https://roadstead.io/ja/scenarios>